

---

# スーパーシンジならぬスーパールイズ

薄赤球体

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

スーパージンジャーパールイズ

### 【Nコード】

N2647F

### 【作者名】

薄赤球体

### 【あらすじ】

使い魔を召還しようとしたルイズはひょんなことから人間を辞めてしまう羽目になってしまった・・・

## プロローグ（前書き）

初めての投稿ですが遅筆となりましても、完結を目指して頑張ろうと思います。

## プロローグ

・・・ザザーン・・・  
ザザーン・・・

波の音が聞こえ、波が砂浜に向かっていく。その波は、砂浜に横たわっていた一人の少年の体を濡らし消えていく。しばらくそれが繰り返され、少年が目を覚ました。

「うつ・・・、ここは一体？それに、あの量産機達はどうなったんだ・・・」

そう呟くと少年は辺りを見回してみた。まず視界に入ってきた物は異常に赤い海、そして少年の同僚である少女のプラグスーツだけが落ちてた。

「この赤いのはLCI・・・？それに何でプラグスーツだけがおちているんだ？アス力は！？アス力は一体どうなったんだ！？教えてくれよ！誰でもいいから何とかいってくれよッ！」

答えられることもなく、帰ってくるのは沈黙ばかりであった。しばらくそのままの状態が続き、声がした。

「・・・セカンドは無に還ってしまったわ、碇くん・・・」

「あ、綾波！？一体どこから・・・いや、それよりも無に還ったってなんなんだ！？」

碇君、と呼ばれた少年が思わず突如現れた綾波と呼んだ少女に怒鳴

るようにして聞き返す。それに答えたのは、また別の声だった。

「それは文字道理の意味だよシンジ君。サードインパクトが発生し、心が壊れていた彼女はそれに耐えることが出来なかった、ただそれだけの事さ。」

「カ、カヲル君まで！？どこに隠れてたんだよ・・・それに、サードインパクトが発生しちゃったって本当なの！？アスカがいないこととなんの関係があるっていうのさ！？」

そうしてシンジはカヲルと呼んだノンケでも思わずホイホイついていってしまいそんな少年に尋ねた。

「かくかくしかじか、そういうわけなんだよシンジ君。」

シンジはカヲルから、それまで2人がどこにいたのか、サーインパクトとは何か、アスカの液化化現象はもちろんのこと、好きな男のタイプまでを詳しくより明確に聞いた。（最後のは聞かなかったことにした。そうしなければ身の危険を感じるためだった。）

「そんな・・・なら僕は一体どうすればいいのさ・・・」

「君のしたいようにすればいいさ。僕とラブラブフィールドをつくることも出来るし、なんなら過去に戻ることも可能だからね。」

「それなら僕は過去に戻る！そして絶対にこの悲劇を起こさないようにしたい！」

（そんな・・・始めから最初の選択肢には興味は無いってのかいシンジ君・・・）

落ち込んでいるカヲルをスルーしつつ綾波が続けて言った。

（碇くんとラブラブフィールドをつくるのはこの私・・・ファイフス、貴方は砂粒の数でも数えているといいわ・・・）

「そう、私とこのホモの力を合わせれば過去に戻ることも可能よ。」

復活したカヲルもそれに続き言い放つ。

「そうさ、しかも今ならＬＣＬに溶け込んだ全ての人の知識もお付けするよ。」

パチパチパチ、と綾波が拍手する。シンジは呆然として言葉を発することが出来ずにいる。

「ん？どうやらまだ足りないようだねえ。まったくシンジ君は、しようがないから使徒化＋全ての使徒の能力をおつけするよ。この、いやしんぼめ！」

「ぶらぼー」

何を勘違いしたのかカヲルはそんな大サーブスをし、綾波はそれを褒め称えた。しばらくしてシンジは気を取り直し言った。

「それならその力を僕にくれるかい？綾波、カヲル君。」

「ええ。」「もちろんさ。」

「私（僕）の力よ！人々の記憶よ！使徒たちの能力よ！１つになりなさい！！」

そう叫んだ直後、2人とシンジとの間に赤い30センチ程の球が出現した。

「これが、その力が1つになった物なの？」

「そう。」「そうだよシンジ君。」

その球はフヨフヨと移動を始め、シンジの所まで後一步という所で突如現れた鏡のようなものに飲み込まれ、消えた。

・・・辺りを沈黙が覆った。この空気なら流石にあの髭もダッシュで逃げてしまっただろう。空気が重い、重すぎる。

・・・そしてようやく綾波が口を開いた。

「・・・こんな時どんな顔をすればいいのかわからないの・・・」

「それは僕もだよ、綾波・・・」

2人して口を閉ざしてしまった。その後力ヲルが言った。

「あれれ？僕には偶然にも2人過去に戻るだけの力があるようだよ？」

重要なことをまるでどこかの天然少女のような口調で告げた。

「奇遇ね・・・私もよフィフス・・・」

綾波も負けるまいと言い返す。

（このやろう・・・ッ！力を残して後で有利になれるようにしていたな・・・ッ！）

どうやらこの2人、考えることは大体同じようである。

「ま、まあ、2人とも、ならその力を使って過去に戻ろうよ。」

2人のように怯えつつシンジがそういった。

「そう・・・なら過去に戻りましょう、碇くんとおまけに水モも」

「なら戻るとしようか、シンジ君、後えっと・・・綾なんとかさんも」

（絶対こいつには負けない！！）

そうしてこの終末を迎えた世界から3人の姿は消えた。後に残されたのは赤い海だけだった・・・

同時刻トリステイン魔法学院。

ここでは神聖なる使い魔召還の儀式が行われていた。  
この使い魔召還の儀式は己の魔法の実力が映されているといっている。  
い。

おまけに召還された使い魔は生涯を通して付き合うことになるパー



トナーといっても過言では無いため、不真面目に取り組む生徒はいない。

そのためこの儀式に臨む誰も彼もが今日という日を心待ちにしていただろう。

召還を終えた生徒たちはそれぞれ笑顔で新しい自分達のパートナーとの交流をおこなっている。しかし、そんな中、何故か何度も爆音がその場に鳴り響いていた・・・

（どうしてよ・・・どうして失敗するのよッ！）

ルイズ・フランソワーズ・ド・ラ・ヴァリエール。

彼女が召還の儀式が行われている広場に爆音を鳴り響かせている者の正体だった。

「なあゝそろそろ諦めろよ。お前の精神力より広場がまいっちゃうよwww」

「ていうかゼロのお前が召還できるわけねーじゃんwww」

「はいはいワロスワロス。」

まわりから聞こえてくる声にも耳を傾けようとせず、少女はひたすらに召還の呪文を唱え続けていた。

「ミス・ヴァリエール、次を最後にして失敗したら続きは明日にしないさ。」

「はい・・・コルベール先生・・・。」

どうやらこのコルベールと呼ばれた人物はこの儀式の責任者のようだった。

（ええい！しっかりしなさい私！もう次にかけるしかないわ！）

「宇宙の果てのどこかにいる私の僕よ。神聖で美しく、そして強力な使い魔よ。私は心より求め、訴えるわ。我が導きに、応えなさい！」

今度は爆発はしなかった。そして鏡のようなものが、ルイズの前に姿を現した。

（やったわ！一体何が出てくるのかしら？）

鏡から姿を現したのは赤い、30センチメートルの球のようなものだった。

「よかったね、ミス・ヴァリエール。早く契約をすませるんだ。」

「はい！コルベール先生！」

そうしてルイズは契約の呪文を唱え始めた。」

（やったわ！私！私はやれば出来る娘だったのよ！）

「我が名は、ルイズ・フランソワーズ・ド・ラ・ヴァリエール、五つの力を司るペンタゴン。この者に祝福を与え、私の使い魔となせ」

その物体に口付けした刹那、ルイズに様々な変化が起きた。

流れ込む赤い世界に生きていた人々の記憶、知識、ATフィールドを張ることが出来る体に変化し、その体には全ての使徒の能力が流れ込み、額に何かが浮かび上がる

こうして本来あの少年が手に入れるはずだった力を私は手に入れてしまったんだなあ、と思いつつルイズの脳はその処理能力をはるかに超える情報を処理したために一時的に停止した。

そして次に目を覚ました所は医務室と思われる場所だった・・・。

「・・・見慣れた天井だわ・・・。」

ひよんなことから人間を辞めることになってしまったルイズの明日はどっちだ！



## プロローグ（後書き）

今のところはこの三人組はもう出ないと思います。たぶん。

## 第1話（前書き）

前回人間を辞め、使徒となってしまうたルイズ。そんな彼女がようやく医務室で目を覚ましたのであった。

## 第1話

意識が戻ったルイズはまず、鏡を見てみることにした。貴族たるもの身だしなみは大切だからだった。ところが・・・

「な、何よこれ!？」

鏡を見たルイズの目にまず飛び込んできた物、それは本来、使い魔に刻まれる筈の契約の証のルーン、それが自分の額に刻まれている光景だった。

「何で自分にルーンが刻まれているのよ・・・ハッ!そうよルイズ、これは何かの間違いよ!きっとここは夢の中なんだわ!」

そうやって頬をつねってみた。痛い。今度は太ももをつねってみた。痛い。希望を捨てられず体中をつねってはみたものの、現実が変わってくれなかった。

「どうして私が自分自身の使い魔になっちゃったのよ・・・しかも!気絶する前に見た記憶が本当だったら、試験に失敗して学校を辞めるのよりも早く、人間辞めちゃったことになるわ!」

そう、ルイズは覚えていた。記憶の中で異世界の様子を、知識を、なにより最後の三人組の会話をッ!

「あのシンジっていう奴もちょっとは止めなさいよ・・・全然関係なかったのに、人間辞められた私の気持ちにもなってみてよ・・・」

「

ルイズはこう愚痴をこぼしたが、当のシンジは世界を救うという目標があつたために止めるなどこれっぽっちもなかったのだ。

「でも・・・すごい力が手に入つたんだし、せつかくだから何か使徒の能力でも使ってみるとしましょう。」

何故、急にルイズが前向きになったのかにはわけがあつた。

ルーンの効果の中には主へ少しずつ好意をすり込んでいくものがある。ルイズは自覚はしていないが、今まさにその効果が発揮されてきたからだつた。

「じゃあまず、えーていーふいーるど？」

なれない発音に、最後は疑問系になりつつ、ルイズは手を前に出してみた。

赤い壁は現れなかった。不発だつた。ルイズはちよつと恥ずかしくなりつつ、誰にも見られてなくて本当によかつたと思つた。

ルイズはいつも魔法の練習をしていては失敗し、医務室に行くことは珍しいことではなかつた。この医務室の担当者もルイズが倒れた後の騒ぎをおさめ、その後の進行で忙しかつたコルベールから説明を受けておらず、運んだ生徒も人を運べる竜を召還したタバサだつたので

「・・・倒れた・・・よろしく。」

としか言われてなかつた。そのため、医務室の担当者も

（あーまたこいつか。3時間後ぐらいに来たらいいか。）



と考え、医務室の扉に鍵をかけ、別の用事でどこかへいつてしまったのだった。

ルイズが目覚めたのは、倒れた40分後と以外に早く、この先1時間ぐらいは人が来ることはなかったのだ。それを知らないルイズは人に見られてはいけないと思い、試すのは攻撃の能力意外にしようと思ったのだ。

ルイズはATフィールドの展開に失敗してからあることを思い出していた。

（ん？たしか誰かがATフィールドは拒絶の意思とか言ってたわね・・・。ようし・・・「ハアハア変な息しながらこっちくんマルコリヌー！」・・・こんな感じがしら？）

その瞬間、ルイズにかけられていた毛布は突然現れた赤い壁に弾き飛ばされた。マルコリヌには悪いがルイズはATフィールドの展開に成功したのであった。

「一度展開出来たらけっこう簡単なのね・・・。次は何にしようかしら？でも、ほとんどがこの部屋を吹き飛ばしそうね・・・。イスラフェルっていう奴のを試してみましよう。」

すると、その場にはルイズが2人になった。某双子芸人も真つ青なほど似ていた。まあ、双子ではなく、分裂したものであるのだから当然ではある。

「私はルイズよ、貴女は？」

「私もルイズよ。ていうか貴女は本体でしょ！それくらいわかってよねー！」

どうやら分身は意思を持っているらしく、区別がついているらしい。おまけに、性格も本体そっくりだった。

「じゃあ、分身の貴女はルーちゃんなんてどう？」

ルイズはふざけてこう聞いてみた。

「私はそれでいいわよ。」

（えっ！？本当にそれでいいの！？）

分身は名前はこだわらないようだった。

他にもルイズが色々話してみようとした時、廊下から足音が聞こえた。

「もうちょっと話をしたかったんだけど残念ね。また会いましょう、ルーちゃん。」

「わかったわ。また読んでね。あつ、べ、別に寂しいから呼んで欲しいわけじゃないんだからねッ！勘違いしないでよね！」

そっぴいのこし、ルーちゃんは本体と1つになった。ルーちゃんの手を聞いたルイズは

（自分はいつもこんな感じなの？）

と不安になったのはルイズだけの秘密だ。

やがてドアがノックされた。

「ミス・ヴァリエール、起きていますか？」

「あつ、はい！コルベール先生。今起きたところです。」

どうやら、声の主はコルベールのようだった。

「ミス・ヴァリエール。貴女の処分に関してですが、学園長の判断はルーン自体は刻むことは成功しているので、進級を許すとのことでした。」

コルベール先生の話によると、何とか私は進級を許されたようだ。まあ、あのオールドオスマンのことだから

「まあ、成功ってことでいいんじゃない？」

というようなノリで許可したんだろう。流石にそれはないかな？

実際はルイズの思った通りのようだったということは、ルイズ本人は知るよしもない。他にはルイズの両親の圧力が怖いから、という理由もあつたからだった。

「今日は色々あつて疲れただろう。起きても大丈夫なら部屋に戻ってもかまいませんよ。最後に、進級おめでとう！ミス・ヴァリエール！」

「ありがとうございます、コルベール先生。それと私はもう大丈夫です。部屋に戻らせていただきます。」

そついうとルイズはベッドからおり、部屋に帰っていった。まだ試

してみたいことがあったからだ。

ルイズが医務室から姿を消した後、1人になったコルベールは口を開いた。

「本当に良かったですねミス・ヴァリエール。あの娘は人一番努力していましたからね……。それにしてもあのルーンは見たことがありますね。ふむ、図書室の本の中にこのスケッチの模様と合うルーンを探してみるとしますかね。」

コルベールも部屋から出て行こうとしたとき、視界の端に何かが入ってきた。

「おや？こんな所に毛布が。ミス・ヴァリエールは寝相が悪かったのでしょうか？」

そういつつ、コルベールはベットから結構離れていた場所に落ちていた毛布をベットの上に置いた後、部屋を出て行った。

一方部屋に戻ったルイズは、

「今日は疲れたから試すのはレリエルのディラックの海っていうやつでの移動実験で終わりにして寝ましょう。」

そういうと、ルイズは移動先を考え始めた。

「うーん。どうせやるなら遠くにいききたいわね。えーと……。そうだわ！私の家の中庭の池の小船の近くにしましょう！もう暗くなるからきつと誰もいないわ。」

決まり！決まり！そういうとルイズは足元に広げた影のようなものに潜っていった。

ラ・ヴァリエール家にある中庭。そこは先程までは誰もいない場所だった。だが、中庭の一箇所に影のようなものが広がると、そこから人が現れた。

「うわー本当についちゃったよ。ホント私って人間じゃなくなっちゃったんだなあ・・・。」

どうやら、ルイズはあまりに人間離れた自分に若干引いているようだった。

「でも便利ね、これ。実は私、相当ラッキーだったんだわ。いままで涙を吞んで頑張ってきた16年間、きっと神が私の努力を認めてくださったのね！ありがとう、始祖ブルミル！ありがとう、あの2人の気まぐれ！ありがとう、あの球に触れないでくれていたシンジ！」

ルイズはそういうと、始祖やあの三人組に感謝をした。しばらく祈りのポーズのルイズだったが、飽きたのか、また自分の足元に影のようなものを広げ学院に帰っていった。

自分の部屋に戻ったルイズは、すぐにベットに飛び込んだ。どうやらずいぶんと疲れていたようだ。

ルイズはうつとうとしながら思った。自分には昨日までは何もなかった。あったのは自分の「ゼロ」という不愉快きわまりないあだ名だけであった。

だが今日、それは覆された。自分はアダムやリリス、他の使徒達的能力が手に入った。実現出来るかどうかはわからないが、科学という魔法とは異なった知識も持っている。

だが、その力に溺れるようなことはしないと誓う。現に、あの記憶の中に出てきたネルフという組織はあまりに大きすぎる知識を持っていたため、最後には滅んでしまった。

自分は貴族らしく、華麗に生きるのだ！そうルイズは心の中で誓い、眠り始めた。

彼女の寝顔は今までの人生で、最高に幸せそうだった。

## 第2話

翌日の朝、ルイズはいつもよりも早く目が覚めた。窓の外はまだ薄暗く、後1、2時間はしないと太陽は昇らないだろう。

「ふあゝあ、よく寝たわ。でも、ちょっと早く起きすぎたわね。暇だわ。」

ルイズは、洗顔をすませ服を着替えると、ベッドに腰をかけそう言った。

「またディラックの海の実験でもしていようかしら。今度はどこに行こう？・・・あつ、あの3人がいた世界に行くことは可能なのかしら？」

ふと、そんな考えが浮かんだのでルイズは考えてみた。

（そもそも、時間を移動することは流石に無理と思うのよね・・・でも、現にあの3人はあの場合から消えた。ひよつとすると、あの3人が行った先は過去では無く、まだサードインパクトが起こる前の同じように異なった世界へと行ってしまった、そう考えられないかしら？）

あの知識の中にこんな考えをする学者達がいた。

例えばじゃんけんをしているAとBがいたとしよう。じゃんけんをするまでは同じ世界で、Aがグーかチョキかパーを出す可能性があるようにそれぞれの手を出す歴史を持った世界が3つ出来る。よって世界はあるで、分かれていく木の枝のように沢山の世界が出

来る

この説が正しければ、あの3人はその沢山の世界の内の1つに行つたということになる。

（あの3人はただ世界を移動したとすれば、私も異世界であるハルケギニアからあの赤い世界にいけるかもしれないわね……。よし！ いっちょやってみましょう！）

そうしてルイズはあの赤い世界のことを脳裏に思い描きながら、影のようなものを足元に広げ、潜っていった……

今は全生命が滅んでしまった地球、あいかわらず赤い波が海岸に押し寄せる以外は特に変化は無いのだが、少女が消えてしまった場所にルイズは姿を現した。

「着いた、ということはやっぱり異世界の移動なら可能なのかしら？ だったらもし召還したのがあの球じゃなく、あの3人組だったら逃げられてたかもしれないわね……。ルーンも強制的に解除されてたかも……」

あーこわいこわい、とルイズは呟くとルイズは記念に持つて帰るものを探し始めた。

「やっぱり、電化製品はもって帰りたいわね……。病院とかの施設に行けば発電機ぐらいはあるかしら？」

そうして行動し始めたルイズだった。



約1時間後、ルイズは様々な物をデリラックの海に入れていた。まるで猫型ロボットのポケットみたいな使い方である。

「家電製品の他に侵攻してきていた戦自の装備品も沢山手に入っただわね……。ついでにアダムの力を使えばロンギヌスの槍も回収できるのかも……。」

そういうとルイズは強く念じ始めた。

（ロンギヌス来い！ロンギヌス来い！ロンギヌス来い！ロンギヌス来い！ロンギヌス来い！ロンギヌス来い！）

すると案の定、空の彼方から赤い槍が急接近してきた。やがてそれはルイズの側に来ると、ルイズが持てる大きさになってしまった。

「……………これは、流石に、反則よね……。いざという時だけに使うとしてその時意外はずっとデリラックの海に中に放り込んでおきましょう……。」

そう決めるとルイズはまた学院の自室に戻っていった……。後に残されたのは赤い、ルイズの便利な道具管理庫となったのにも等しい世界だけであった……。

自室に戻り、部屋を出たルイズは同級生であるキュルケに声をかけられた。

「おはようルイズ。あれ？貴女って進級出来たの？なら使い魔は何処？」

「おはようキュルケ。使い魔はね・・・何故か知らないけど、私自身にルーンが刻まれちゃったのよ。ほら。」

若干言いにくそうにルイズはそう言つと額のルーンを見せた。

「アハハハハ、な、なによそれ、貴女って体を張ったギャグでもしたかったわけ?! 流石ルイズね! 私には出来ないことを平然とやってのけたわ! でもそこに痺れもしないし憧れようとも思わないけどね!」

「黙りなさいツ! そういう貴女こそ一体何を召還したのよ。貴女って火の系統だからチャツカマンでも出てきたの?」

「ちゃつかまん? 何それ。まあいいわ。これが私の使い魔、サラマNDERもフレイムよ。フレイムくこつちにいらっしやうい。」

その呼びかけに応じるようにしてキュルケの部屋から出てきたのは平均サイズよりも大きいサラマNDERだった。

しかし、ルイズを見た途端にキュルケの背後に怯えるようにして隠れてしまった。ひよつとすると、野生の勘でルイズが自分とは天と地程の差があることを感じ取ったのかも知れない。

「プツ、貴女のサラマNDERって見た感じは大きいけど、性格は随分とちっちゃいようね。何だってゼロである私を見て怯えるんだから。あゝおかしい。」

「ち、ちよつと?! どうしちゃったのよフレイム?! まさか貴方って本当に気が小さいの?・・・はあゝ。何だか朝っぱらから疲れちゃったわ。また後でね・・・ルイズ。」

そう言い残しキュルケは去っていった。そんな彼女とは対照的にルイズはウキウキしながら食堂へと向かっていった。

アルヴィーズの食堂。ここではいつものように食べる前に始祖への祈りを捧げていた。ルイズも祈りを捧げながら

（うわー、これってどう見ても食べすぎよね……。全然ささやかじゃないし……。）

異世界の様子を知ったことで、自分達がどれ程恵まれているのか実感したのである。何だかルイズは食べられる自信が無くなって来たので、あまつた分はこっそりとディラックの海に入れておいた。本当に便利な能力である。

授業を行う教室に移動し、しばらくすると、シュルブルズという土系統のメイジの教師がやって来て、生徒達に魔法の基礎をおさらいさせ始めた。

その間にルイズは他の生徒から使い魔のことでからかわれたが、精神的に成長したルイズは適当に受け流しておいた。

「そろそろ静かにしなさい。ごはん、えゝ皆さんは魔法の四系統はご存知ですね？魔法の四系統とは火、水……」

シュルブルズが基本的なおさらいをしている間、ルイズは暇だった。それらは自分が既に知っているものばかりだったからだ。なのでルイズは少しだけうとうとしてしまっていた。

「……！ミス……！ミス・ヴァリエール！聞いているのですか？」

「あ、ハ、ハイ。ミス・シュルヴルーズ、すみません、聞いていませんでした。」

「なら罰として貴女には前で実際に、連金をしてもらいましょう。」

当てられてしまった。

周りの生徒達もルイズ本人も必死に危険性を訴えた。無駄だった。だからルイズには被害が出来るだけ少なくなるように祈りながら杖を振った。

授業が終了し、ルイズは廃墟の片付けをしていた。そう実はこの廃墟、先程までは授業をしていた教室だったのである。すごいぞ！すごすぎるぞ、リフォームの匠、ルイズ・フランソワーズ・ド・ラ・ヴァリエール！ルイズは前向きに考えようとしてそう考えてみたが、逆にむなしくなってしまった。

しばらく一人で片付けていると、通りすがりらしき一人のメイドが話しかけてきた。

「あの、ミス・ヴァリエール？大変なようですのでお手伝いいたしましょうか？」

「あ、ならお願いするわ。貴女、名前は？」

「シエスタと申します。」

「そう、シエスタっていうのね。ありがとう。」

その後片付けを再開したが、やっぱり人手が増えた分、楽になったようにやがて片付けは終わった。

「ふー。終わりましたね、ミス・ヴァリエール。」

「貴女が手伝ってくれたおかげで早く終わったわ。感謝するわよ。」

「いえ、当然のことをしたまですよ。私のようなメイドなんかに感謝なさらないで下さい。」

「私としては貴族は平民に感謝するべきだと思っているのよ。貴女達のおかげで私たちは暮らしていけるんですもの。後、私のことはルイズでいいわよ。」

「・・・ルイズ様、貴女なら将来、立派な貴族様になれますよ！応援しています！それでは私はこれで。」

そう言いシエスタはペコリ、と頭を下げると教室を出て行った。

「・・・人に感謝されるっていいわね。」

ルイズもしばらくしてから食堂へと向かった。

その後ルイズはヴェストリの広場にいた。そこで、ルイズは何故自分がこんなことになっているのか考えてみた。

きっかけは些細なものだった。ギーシュの落とした香水のビンがシエスタが拾ったのがきっかけだった。その場を何とかをごまかそうとギーシュがシエスタに責任を押し付けようとしたのだ。

そこにさっきシエスタに手伝ってもらったこともあって、ルイズは彼女を援護するようなことを言ったのだった。その後ルイズはシエスタの変わりに決闘を申し込まれ、今に至ったのであった。

（ああ、めんどくさいわね。）

ルイズは周りが騒ぎ立てる中、そう思った。

## 第2話（後書き）

どんだんルイズが最強になってしまふ・・・

### 第3話

「よく逃げずに来たね、ヴァリエール！」

「何で貴方ごときに逃げないといけないの？何なの？バカなの？」

「フツ、そう言っていられるのも今だけだよ、ミス・ヴァリエール！君とは僕のワルキューレが戦うよ。」

杖が振るわれ一体の青銅製のゴーレムが錬金される。

ルイズはここでちょっと悪さをしてみようと思った。

「ギーシュ・・・貴方のワルキューレって素晴らしいわね！」

「ははは、本当のことを言うのはよしてくれよ。照れるじゃないか。」

「でも・・・！貴方のそのワルキューレはそのままじゃ名前負けしちゃうわよ。貴方の青銅のゴーレムはもっと相應しい名前があるわよ！」

「な、なんだって！？それでも一生懸命考えたのだが・・・一体どんな名前が相應しいんだ？！教えてくれミス・ヴァリエール！」

「じゃあ教えるわよ、それはね・・・」

ごくり、誰かが息を呑む音が広場に響いた気がした。



「4千年の歴史を持つ国で作成されたと言われる、高度の技術を搭載した全自動人形。時代を先駆ける者という意味を持つその名前は・  
・ズバリ！先行者よ！！！」

先行者。その名前を聞いた瞬間、ギーシュの体を衝撃が走った。

「先行者・・！なんて素晴らしいんだろう！歴史を感じさせるその名、そして時代を先駆ける者という意味を持つ所！まさに僕のワルキューレにぴったりだ。いや、これからはこのゴーレムは先行者と名付けようじゃないか！」

「そうでしょう！素晴らしい名前よね！」

絶対騙されてる！絶対騙されてるよ、ギーシュ！心なしか前よりも弱くなっちゃったよ、それ！

何故かその場にいた人間は全員そう思った。しかし、ギーシュは本当にそう改名してしまった。

「そう！僕と先行者の歴史は君を倒す所から始まっていくのさ！さあ、いざ勝負！」

「ねえ、ちよつと待ってよギーシュ。私は魔法が使えないから銃を使ってもいいかしら？」

「ぶつ、君は平民なんかの道具に頼るのかい？まあいいだろう。使うが良いさ！」

ルイズは流石にディラックの海を公の場にさらすつもりはなかったので、自分の部屋に戻ったように見せかけ、適当に引き当てた三脚

がついているマシンガンを引つ張ってまた広場に戻ってきた。

「待たせたわねギーシュ。後、死にたくなかったらフライで空中から指揮をとった方が良いわよ。」

「ん？ずいぶん変わった銃だね。先行者という名前をくれた君がそう言うのならそうしよう。さあ、いけ！先行者！」

ギーシュがその声を張り上げると同時に、先行者がルイズに襲い掛かってきた！

ズガガガガガ、ズガガガガガガ。

ルイズにたどり着く前に先行者はたったの5秒ほどで体の軽量化に成功していた。穴が沢山出来て風通しも良くなったようだ。まあ、肝心の攻撃は失敗してしまっていたが。

沈黙が広場を支配した。ハッと我に返ったギーシュが恐る恐るルイズに尋ねた。

「あ、あのー、ミス・ヴァリエールさん？貴女が使っている物は一体何なのでしょうか？」

「見て分らないの？銃よ。」

「嘘をつくな！銃は連射出来ないだろうが！たった5秒ほどであんなになるなんて、君は何発撃ったんだ？！」

ルイズは銃の性能を思い出しながら言った。

「えーと？120発ぐらい？ごめんなさい。他の物とこつちやにな  
ってるかもしれないわ。」

120発！？その場にいた誰もが啞然とした。科学技術が遅れてい  
るハルケギニアの銃は先端から銃弾タイプなので1発しか撃てない  
からだった。

「いやいやいや、そんな銃だと知っていたら許可は出さなかったよ  
ー！」

「男に二言は無いつて前、貴方が言っていたじゃないの。矛盾して  
ない？」

「うつ・・・なら、行け！先行者達！」

慌ててギーシュは杖を振るい、それにあわせて出現する六体の先行  
者達。

そして約1分後・・・

案の定、先行者達はただの青銅の破片と化してしまっていた。

「まだ続ける気はあるの？ギーシュ。」

「もう見て分かるだろ・・・降参だよ・・・。」

その後はルイズがギーシュにモンモランシーやケティ、シエスタな  
どに謝罪をさせ、決闘は終了した。食べ損なった昼食をとる為に食  
堂へ戻ったルイズが、シエスタから詳細を聞かされ感動したマルト  
ーに

「お前さんこそ本当の貴族だ!!」

と抱きつかれ、ちょっとした騒動があったのは完全に余談であった。

一方、オスマン達は・・・

「間違いありません!あの額のスケッチのルーンは間違いなくミョズニトニルンのルーンです!」

今日は珍しくミス・ロングビルが熱を出して休んでおり、決闘のことを報告しようとする教師達もいなかった為に広場の決闘に気付くことはなかったであった。

### 第3話（後書き）

今回はいつもよりも短くなってしまいました。次回は今回以上に頑張りたいと思います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2647f/>

---

スーパーシンジならぬスーパールイズ

2010年10月14日15時39分発行